

## ウェスレー家の実際 チャールズ・ウェスレーとその子供たち

The Wesleys at Home: Charles Wesley and His Children, *Methodist History*, 36:3 (April 1998) <sup>1</sup>

フィリップ・オレソン<sup>2</sup> (Philip Olleson)

訳・久保光彦

公的生涯の側面に当然のように注意関心をより集中させてきた伝記作家たちから、チャールズ・ウェスレーの家庭生活は、しかるべき注目をおそらく常には受けていなかった<sup>3</sup>。兄のジョンにとってそうではなかったが、チャールズにとって、家庭環境は大切なものであるという前提があった。彼の人生にとって大切な家庭環境と、彼の家族を構成する妻のサラ（1726-1822）、娘のサリー（1759-1828）<sup>4</sup>、息子のチャールズ（1757-1834）とサムエル（1766-1837）<sup>5</sup>との関わり合いとに、どのような伝記的研究で

---

1 この論文は、*Methodist History*と著者 Philip Olleson の許可を得て翻訳されている。

2 フィリップ・オレソンは英国ノッティンガム大学教育学部で音楽を講じた（現在は名誉教授）。サムエル・ウェスレーに関しての著作が多数あり、専門的な書簡集の準備がオックスフォード大学出版を通して進んでいる。

3 チャールズ・ウェスレーの伝記に関しては、二巻本のトーマス・ジャクソン著、*The Life of the Rev. Charles Wesley, M.A.* (London: John Mason, 1841)、ジョン・テルフォード著、*The Life of the Rev. Charles Wesley*. (London: Wesleyan Methodist Book Room, 1900)、フレデリック・ルーク・ワイズマン著、*Charles Wesley, Evangelist and Poet*. (London: Epworth Press, 1933)、フレデリック・C・ギル著、*Charles Wesley, the First Methodist*. (New York: Abindon Press and London: Lutterworth Press, 1964)、アーノルド・ダリモア著、*A Heart Set Free: The Life of Charles Wesley*. (Welwyn, Herts: Evangelical Press, 1988)などを参照。ジョージ・ジョン・スティーブンスン著、*Memorials of the Wesley Family*. (London: S.W. Partridge and Co., 1876)の関連する章も参照のこと。

4 本論においては、サラがウェスレーの妻の名前、サリーが彼の娘の名前とする。

5 子供たちについての伝記は、スティーブンスン著、*Memorials of the Wesley Family*の該当する章を参照すること。チャールズとサムエルの音楽活動の履歴

あれ、注意を払うべきである。本論ではチャールズ・ウェスレーの家庭生活  
に対しての姿勢と、その子供たちとの関係について、日記、書簡、詩、家族  
に関する未発表資料、そして同時代の証言を基にしなが、注目をしてい  
く<sup>6</sup>。

このような資料から得られる情報と対峙するとき、伝記作家の最初の懸案  
事項の一つは、その文脈である。家族生活の肖像、表面に浮かび上がる両親  
としての姿勢の範囲は、その時代そして彼らが含まれていた社会の中での典

---

に関しては、20 巻本の、スタンリー・セイディ編、*The New Grove Dictionary of Music and Musicians* (London: Macmillan, 1980)を参照のこと。サムエルについて  
のより広範な研究は、ジェームス・T・ライトウッド著、*Samuel Wesley, Musician* (London: Epworth Press, 1937)を参照。またウィリアム・ウィンターズ  
著、*An Account of the Remarkable Musical Talents of Several Members of the Wesley Family, collected from Original Manuscripts, &c., with Memorial Introduction and Notes* (London: F. Davies, 1874)やエリック・ラウトリー著、*The Musical Wesleys* (London: Herbert Jenkins, 1968)などを参照のこと。

6 チャールズ・ウェスレーの全書簡集がない場合は、二巻本の、トーマス・  
ジャクソン編、*The Journal of the Rev. Charles Wesley, M.A.; to which are appended Selections from his Correspondence and Poetry*(London: John Mason, 1849)、フラン  
ク・ベーカー著、*Charles Wesley as revealed by his Letters* (London: Epworth Press, 1948)を参照のこと。また、アーサー・ウェインライト、ドン・E・サリアーズ  
共編の *Wesley-Langshaw Correspondence, Charles Wesley, his Sons and the Lancaster Organists*(Atlanta: Georgia: Scholars Press, 1993)に所収されている 1779 年から  
1784 年にかけてのチャールズ・ウェスレーからジョン・ラングショー宛の書簡  
群も参照せよ。チャールズ・ウェスレーの詩については、ジョージ・オズボ  
ーン編の 13 巻本、*The Poetical Works of John and Charles Wesley* (London: Wesleyan  
Methodist Conference Office, 1868-72)と、S・T・キンズブロー、オリヴァー・  
A・ベッカーレック共編の 3 巻本、*The Unpublished Poetry of Charles Wesley*  
(Nashville: Kingswood Books 1988-91)を参照せよ。 フランク・ベーカー編、  
*Representative Verse of Charles Wesley* (Nashville: Abingdon Press, 1962)と、ジ  
ョン・R・タイソン編、*Charles Wesley: A Reader* (New York and London: Oxford  
University Press, 1989)をも参照すること。チャールズの妻サラと三人の子供た  
ちの書簡を含むウェスレー家に関する書類は、ジョージア州アトランタのエモ  
リー大学 (以降エモリー) と、マンチェスター大学のジョン・ライランズ図書  
館 (以降ライランズ) の二箇所所蔵されているコレクションが最も重要である。

型的なものである。従って、本論は 18 世紀の英国における教育と子育てに関する一般的な姿勢、特にメソジズムの中で顕著であった姿勢を考察する事から始め、さらにはウェスレー家の子供達の、幼少期とその早い時期における養育について調べる。両親そして子供たちのいずれの視点からしても、証拠となる資料は均衡が取れておらず、妻のサラと娘のサリーが犠牲になることにより、チャールズと息子たちにとっては最悪目になっている。サラ・ウェスレーの（子育てに関する）具体的な姿勢と貢献度についての情報がなく、しかし（彼らの）結婚の他の側面について私たちが知ることを念頭におくとき、チャールズの視点と姿勢は、彼女にも共有されていたと、私たちに考えることしか出来ない。子供たちに関する限り、主だった資料は、音楽家として神童であったチャールズとサムエルに関するものである。残念なことに、兄弟たちが持っていた卓越した音楽の才能を持ち合わせておらず、人前に出る機会が少なく、関心を引きつけることも少なかったサリーの、幼少期に関する資料は比較的数が少ない。

チャールズの晩年において、彼の家族生活の中での最も重要な出来事は、当時、問題の多い思春期から初期の成年期にさしかかっていたサムエルとのやりとりである。ウェスレーの三人の子供の中で、サムエルは最も音楽的才能に恵まれていた。彼は同時に徹底的に彼の家族の価値観とメソジズムを拒絶し、そのことは家族を悲しませ、メソジスト社会全体の不幸事となった。サムエルの晩年の生涯に関するものはチャールズの死以降のものがほとんどであるので、本論において直接的な妥当性はない。しかし、ローマ・カトリックとの関わりと改宗、そして長年に渡るシャーロット・ルイザ・マーティンとの情事は、ともに 1780 年代に端を発するものであるので、チャールズの晩年において、重要かつ非常に緊張の多い特徴の一つとして考察されることになる。

## I

過去三十年もしくはそれ以上に渡る、集中した且つ細かな注目にもかかわらず、両親と子供の関係性がどのように変わっていったかという事について

の、最も大まかな概略についてさえ合意が少ないという点で、幼児期の歴史は未だに論争を呼ぶ題材である<sup>7</sup>。多くの歴史家は、しかしながら、17世紀後半における、それまで主流であったものからの、子どもと教育に関するより自由な姿勢への動きを指摘する。これらの新しい姿勢は、18世紀の教育に関する考え方に多大な影響を及ぼした、ジョン・ロックの『教育に関する考察』（1693）の中でまとめられ要約されたものである<sup>8</sup>。J・H・ブラムの言葉によれば、17世紀の両親の大勢を占めていた子どもに対する姿勢は、「独裁的な、事実、凶暴な」<sup>9</sup>ものであった。絶対的な服従が子供には求められ、規律違反は厳しい罰をもって報いられた。新しくより自由な姿勢は、より穏やかな扱いの重要性を強調した。子供たちは、彼らに取って魅力的な、報奨と罰の連続によって有能で洗練された社会の一員になるべく育てられた。（新旧）どちらの手法も18世紀の教育思想に見出すことが出来るが、より現代的な手法が主流となっていた。

このふたつの手法は分離した宗教的、神学的な血統を持つ。古い手法はカルヴァン主義的であり、子供の原罪を通して獲得された本質的に邪悪な性質

- 
- 7 家族と子供時代の歴史に関するアプローチの概略については、マイケル・アンダーソン著、*Approaches to the History of the Western Family, 1500-1914* (London: Macmillan, 1980)や、マリー・アボット著、*Family Ties: English Families 1540-1920* (London: Routledge, 1953)の序章を参照のこと。多大な影響を及ぼしたいくつかの研究は（年代順に）フィリップ・アリエス著、*Centuries of Childhood: A Social History of Family Life*。
  - 8 ジョン・ロック著、*Some Thoughts Concerning Education* (London, 1693)。現代向けの版としては、ジェームス・L・アックステル編、*The Educational Writings of John Locke: A Critical Edition with Introduction and Notes* (Cambridge: Cambridge University Press, 1968)(London: Cape, 1962)、ローレンス・ストーン著、*The Family, Sex and Marriage in England, 1500-1800* (London: Weidenfeld and Nicholson, 1977、簡略版は Harmondsworth: Penguin Books, 1979)、リンダ・A・ポロック著、*Forgotten Children: Parent Child Relationships from 1500-1900* (Cambridge: Cambridge University Press, 1983)、さらには *Past and Present* 誌 65号(1975年5月発行) 64から95ページに所収されているJ・H・ブラム著、“The New World of Children in Eighteenth Century in England”を参照のこと。
  - 9 ブラム著、“The New World of Children”、65頁。

を強調した。1658年のリチャード・アレストウリーの言葉によれば、「新生児は、私たちの最初の両親から、私たちの腰を通じて受け継いだ、罪の染みと汚れに満ちている。」<sup>10</sup> 対照的に、新しい手法は、子供の本質的な良さと純真さ、そしてふさわしい教育と親の指導があれば、子供は悪の力に打ち勝てるという信念を強調した。この子供を墮落以前のアダムになぞらえる観点に対する神学的な支持は、早くは1628年のジョン・アールの『小宇宙構造論』に見出すことが出来る。「子供は半人前ではあるが、イブや林檎を味わう前のアダムの最良の模造でもある。彼（子供）は、悪を知らないがゆえに、純粋に幸福である。」<sup>11</sup> 子供の純真の強調は18世紀においてより顕著になるもので、どのような装いであるにせよ、子供と幼年期に対する数多くのロマン主義的姿勢の、根幹を成すものとなるものであった。

子どもに対する新しい接し方の中の最も目覚ましい特質の一つは、子供の合理性と、育児全般に渡ることにはたいしてなされた強調であった。その時代にあっては明白に新しい視点を説明する際、ロックはこう述べる。

子供と論じ合う、などと私が言うと、驚かれることだろう。しかしながら、私はそれが彼らを扱う上で正しいやり方だと考えざるを得ない。彼らは言語を習得するのと同じ早い段階から、そのことを理解する。そして、もし私が間違った観察をしていないのなら、彼らは思われているよりも早い段階から、理性的な被造物として扱われたいのである<sup>12</sup>。

しかしながら、チャールズとジョンの母であるスザンナ・ウェスレーによって採用された手法は、1732年7月24日付けの賞賛された手紙にも残されているように、古い方の、より厳しい試みであった。彼女が「主要な法則」

10 リチャード・アレストウリー著、*The Whole Duty of Man* (London, 1658)20頁、プラムの“The New World of Children”の65頁に引用されている。

11 ジョン・アール著、*Micro-cosmographie* (London, 1628)1-2頁、プラムの“The New World of Children”の68頁、註22に引用されている。

12 *Some Thoughts Concerning Education* 第81段落

を観察した中で最も顕著であったものは、彼女の子供たちの「意志を制すること」であった。

手遅れになる前に、子どもの意思を制することを私は強く主張します。なぜならこれが宗教教育のもっとも力強く理にかなった基礎だからです。この基礎なしには、教えも例も効果がありません。しかし、もしこのことがしっかりとなされているならば、子供は自身の思考が熟成するまでは、両親の理性と敬虔さによって支配されることが可能になり、宗教に関する主要な事柄は、精神に根を張ったのです<sup>13</sup>。

子どもの意思を砕く必要があったのは、メソジストにおける子育て理論の教義の力を実現させるためであった。一般的な神学的正当化はスザンナによるものであって、子供たちは成人してからのキリスト者生涯に備えて、自身の欲望を両親に従属させるべきであるというものであり、そうすることによって彼らの意志を神の意志に従属させることになるというものである。

自己意志はすべての罪と悲しみの根源であるので、それを子供の中に抱かせるものは、どのようなものであれ、彼らののちの人生においての非遇と無宗教を確約するものです。もし私たちが、宗教は神の意志を行うことであって、私たちの意志を行うことではないということを考えるなら、これはさらに明白です。自己意志が一時的そして永遠の幸福にとっての大きな障害物であるなら、どのような些細な放縦であれ容認することは出来ませんし、（それに対する）どのような否定も利益を伴わないことはありません。天国か地獄かは

---

13 ジョン・ウェスレーによって *Journal* の 1742 年の 8 月 1 日付の項目に引用されている。ネヘマイア・カーノック編、8 巻本、*The Journal of Rev. John Wesley, A.M.* (London: Robert Culley [1909-1916], vol.3, 36 頁)、アルバート・アウトラー編、*The Works of John Wesley, Vol.3: Sermons III* (Nashville: Abingdon Press, 1986)361-72 頁に収められている説教、「両親への服従」(1784)でも引用されている。

この一事にかかっているのです。ですので、このことを子供の中で確立させるべく研究する親は、一人の魂を刷新し救うために、神と共に働いているのです。自己意志を好きなままにさせる両親は悪魔の仕事をしているのであり、宗教を非実際的なものとし、救いを非実際的なものとしているのです。そしてそのすべては子供、その体と魂を永久に呪うべく嘘を付くのです<sup>14</sup>。

スザンナの視点とチャールズ自身の子供時代の経験は、ジョン・ウェスレーの教育思想に顕著である<sup>15</sup>。キングスウッド・スクール（1749）<sup>16</sup>のための教案と校則の中で、彼はスザンナの方針と、ヘルンフートにおいて彼が観察した、モラヴィア派の教育実践の要素を組み合わせている。結果的に、それは修道院的な厳しさを伴う形態となった。教案の中で許されている活動は、学課、祈祷、歩行そして庭か室内における労働であり、子供たちは絶え間ない大人の監視下にあった。息抜きをすることは許されておらず、遊ぶことは特に除外されていた。

遊ぶ日というものは設けていないため（一年を通して、学校は日曜以外教えられていたため）、いかなる日であっても遊ぶことは許していません。子供の時に遊ぶものは、大人になった時にも遊ぶのです<sup>17</sup>。

ジョン・ウェスレーの教育と子育てに関する視点は、年をとるにつれても、

- 
- 14 ウェスレー著、*Journal* 1742年8月1日付。  
 15 ジョン・ウェスレーの教育思想に関する全般的な議論は、アルフレッド・H・ボディ著、*John Wesley and Education*（London: Epworth Press, 1936）を参照。  
 16 14巻本、トーマス・ジャクソン編、*The Works of John Wesley*（London: John Mason, 1829-1931）vol 13, 249-54頁。ルパート・デイヴィス、A・レイモンド・ジョージ、ゴードン・ルップ共著の*A History of the Methodist Church in Great Britain*（London: Epworth Press, 1988）vol.4の104-6頁に引用されている。  
 17 ジョージとルップ、104-106頁。

息抜きの兆候を全く見せない。そして、本質的に同様の主義主張は 1780 年の同じ題目に関する説教で繰り返されている<sup>18</sup>。

## II

そのような視点はチャールズ・ウェスレーによっては共有されていなかった。それ以外の様々なものでもそうであったが、教育と子育てに関しても、兄弟二人の姿勢は非常に異なるものであった。より極端なジョンの姿勢は、子どもの心理を理解することに失敗していることで性格づけられている、それは、今日では多くの賛同者を得ることはない激しさと厳しさを持っている。その一方でチャールズは現代の読者が理解可能で、自らを重ねあわせることが容易な存在である。賛美歌、詩、手紙の全てが、彼の子どもに対する深い愛、そして深い関わり合いを証明している。子どもの誰かが病気であったときの心配、幼年にして早世したものたちへの悲しみ、育児に際しての様々な世話、彼らが成功したときの喜び、誰かが、チャールズの持っていた高い行動の基準を満たすことを失敗したときの失望。

チャールズが結婚を経て子育てに入ったのは遅かった。彼が結婚したのは 41 歳で、初めての子供でわずか 18 ヶ月の命しかなかったジョンが生まれたときは 44 歳であった。成年期まで生き延びた最初の子供チャールズが生まれたとき、彼は 49 歳であった。最年少のサムエルが生まれたときは 58 歳であった。とはいえ、彼は自分の子どもを理解し、彼らの世界に入り込み、彼らの個性と才能に最も適した育て方をするための、あらゆる努力をしたようである。彼の取った手法のいくつかの側面、特に彼の真面目さ、規律に関する主張、そして子どもの側で大人理解を求める前提の傾向は、正統派のメソジストの思考を反映している。しかし、他のいくつかの面においては、かなり自由主義であった。彼の子供のための詩が示すように、彼は常に子供に対して真面目だったわけではなく、そこには発達した楽しみという感覚が

---

18 アルバート・アウトラー編、*The Works of John Wesley Vol.3: Sermon III* の 333-372 頁に所収されている、「家族の宗教について」、「子どもの教育について」、そして「両親への服従について」の説教を参照のこと。

あった。彼はまた子供の生活の中での遊ぶことの重要性をも認め、少なくともサムエルは、多様なペットを飼うことを許され、凧揚げや他の男の子らしい遊びに耽ることが許されていたことを、私たちは家族間のやりとりから知ることができる<sup>19</sup>。しかし、他の子供達との友達関係については奨励されてはいなかった。チャールズからサラへの日付不明の手紙は「子供たちはお互いを駄目にしあう存在だ」という理由から、同年齢の友人を持つことについて警告している<sup>20</sup>。重要なことに、同様の理由からであろうが、チャールズとサムエルはキングスウッドには送られず、家庭で教育を受けている。

その大きな理由は、息子であるチャールズとサムエルの、私たちが彼らの初期の人生についてよく知っている、天才子供音楽家としての名声である。弁護士であり古物収集家であったデインズ・バリントンにチャールズが語ったところによれば、幼いチャールズは2歳9ヶ月で「いともたやすく、拍子に合わせて」ハープシコードの曲を弾き、さらにその後には「母親が歌ったものや彼自身が通りで聞いたものをいとも簡単に再演してみせた。<sup>21</sup>」サムエルの音楽的才能も同じくらいの年齢の時にはすでに顕著だった。彼の父親によれば、サムエルは独学でヘンデルのオラトリオ『サムソン』を読譜し、五歳の時には「サムソン」と「メサイア」の全ての独唱曲、朗唱、合唱曲を、歌詞と楽譜を完璧なまま暗記していた」という。同じ時期には、彼自身のオラトリオ『ルツ』の独唱曲を頭の中で作曲したとされているが、八歳になるまでそれを記譜することは出来なかった。

これらの、そして他の逸話から顕著なのは、この二人の天才少年は、並外れて早熟であり、この二人の幼少期と子育ては、他の子供と比較したとき非常に異なるものであったということである。神童として、彼らは大人の広範

19 ライトウッド著、*Samuel Wesley, Musician* の45頁に、1777年のサムエルの手紙が引用されている。

20 *Journal of Charles Wesley*、第2巻、246頁。

21 チャールズの説明はバリントンに提供され、バリントン本人の分析と共に彼の *Miscellanies* (London, 1781) の291-310に所収されている。バリントン(1727-1800)は音楽的にすぐれた子供たちに関心を示しており、早くには、1765年に彼がロンドンにて出会い、調査をしたモーツァルトに関する記録を残している。

な関心の的であり、家庭や公共の場で、訪れる者たちに、(音楽的) 習熟の度合いを発表するようにと要求されることがしばしばであった。この早い段階からの大人世界への関与は、彼らが成長して、音楽的教育が発達するようになっても継続した。

チャールズの彼の息子たちの音楽的才能に対する姿勢は必然的に曖昧なものであった。彼自身も音楽を愛するものとして、自分の息子達が才能溢れた音楽家であったことは喜びであり、その才能は神からのものであって、最大限に伸ばされるべきだと認めていた。同時に、子供時代に有名人になることの招かれざる結果について、彼は追々気づくことになったのであろう。子供たちは、必ずしも喜ばれたり渴望されるものではない大人たちのある一定の注目とお世辞を受け、不可避免的に、より普通の子供時代のあれやこれやを逃していた。

そのような問題は、いかなる時代であっても、天才少年とその親につきものである。ウェスレー家の場合においては、チャールズのメソジズムの中における卓越した立場と、メソジズムに深く根付く音楽への猜疑心とによって、それら(の問題)は悪化した。ジョン・ウェスレーの音楽に対する独自の見解は、『音楽の力に関して』<sup>22</sup> という論文に記されている。礼拝の文脈の中で狭く定義された音楽の種類に関しては価値を認める用意がある一方、感覚的に訴えかけることや、世俗的な快樂、特定するなら舞踏と劇場との結びつきに、彼は深い不信感をいだいていた。ジョンにとってそうであったように、多数のメソジストにとって、音楽を生業とすることは神中心の生活と釣り合いが取れないものであり、チャールズ・ウェスレーの二人の息子を取り巻く音楽家たちは、彼らにとって非常に不適切なものとみなされていたであろう。加えて、居心地の悪いことではあったが、メソジスト社会の中で多数のものがすでに、彼らから見れば世俗的な生き方を批判したがっていることに、チャールズは気がついていたのであろう。ジョン・フレッチャーは、おそらく広範な懸念材料であったことについて書いたときにこのように述べた

---

22 1779年6月9日インパネス(スコットランド北部の中心都市)にて書かれたもの。1781年の *Arminian Magazine* 4号104-107頁に所収されている。

あなたにはあなたの兄弟がいるように、あなたの敵がいるのです。彼らはあなたの音楽への愛、上質で偉大な取り巻きの集団、そしてあなたが以前に持ち合わせていた情熱と質素さに対して不平をこぼします。罪にあふれた扮装を絶ち切るように私があなたに思い出させる必要はありません<sup>23</sup>。

11 歳だったチャールズが演奏会で演奏することに反対したあるメソジストの女性の批評家に、チャールズはうんざりした諦めと保身の姿勢をほめかす物以上のものをもって、回答している。

私は自分の息子を聖職者にしようとしたはずやってまいりました。幼少の頃から顕著であった気質が彼を音楽家として運命づけたのです。私の友人は、その傾向に邪魔をしないようにと私に進言しました。実際、それは可能なことではありませんでした。彼の指を切り落とすこと以外に、音楽家であることをやめさせる方法はなかったのです<sup>24</sup>。

そのような批判は、回顧的な懸念を声にする独自の理由があったトーマス・ジャクソンやジョージ・スティーブンソンなどの後年の作家によっても表明されている。実際の出来事より後になってそのことを書くとき、チャールズとサムエルがその晩年に両方共、メソジズムからはるかに遠ざかったという事実に彼らは直面するのである。特にサムエルの振る舞いは度を越して反抗的であり、メソジスト社会に取っては明らかに恥とされるものであり、解釈と説明を切に要求するものであった。そのようなときに目を向ける便利でもっともらしい部分は、子供たちの子供時代と子育てである。ジャクソンに

---

23 1771年10月13日付のジョン・フレッチャーからチャールズ・ウェスレーへの手紙。ギル著、*Charles Wesley: The First Methodist* に引用されている。

24 1769年2月3日付のチャールズ・ウェスレーからエレノア・ラローシエへの手紙（ライランズ蔵、DDWES 4/73）ペーカー著、*Charles Wesley as Revealed in his Letters* の110頁に引用されている。

よれば、例えば、サムエルの素行のほとんどは、天才少年という有名人の肩書きを、彼の父親が軽率に扱ったことによるという。他の要因としては、サムエルの名付け親であり、自身も鋭敏な音楽家であり、若き日のサムエルがその子供時代、かなりの時間を一緒に過ごした、マーティン・マダン牧師の有害な影響だという。

その少年（サムエル）が音楽家としての早熟の才能を示したとき、この聖職者は、友人と共に、天才少年だということで、彼をあちこち連れまわした。子供は、非常に若かったのであるが、分別があり、気がきいた。それゆえ、彼は自分が賤しめられていると感じ、少年の驚異として見世物にすることによって父親が自らを苦しめているという、偏見を心に抱いた。これは彼にしてみれば本質的な傷であり、後に彼が苦々しく嘆くことになる下り坂のまさに出発点でもあった。この時代以降、父親の判断に対する正統な尊敬を払う気が彼にはなくなった。そして彼は、もしあらゆる面において成熟していたなら、感情を統率するものとして機能し、霊的な良きものを受け入れ続けさせていたであろう穏やかで子どもらしい情感を失ってしまった<sup>25</sup>。

ジャクソンのコメントの正確さを判定するのは不可能であるが、その当時、そしてその後にも示されたサムエルの振る舞いの説明を象徴している点では、価値がある。サムエルに悪影響をもたらしたのはマダンであったということ立証する事例において、その判断が後から得た知識に影響されていることは疑いがない。なぜならマダンの悪名が高まったのは、1780年の論議を呼んだ論文 *Thelyphthora* の出版以降だからである<sup>26</sup>。同時代におけるその事例

25 ジャクソン著、*Life* 357頁。

26 マーティン・マダン(1725-1790)は1758年から死ぬまで、性病に苦しむ女性のために慈善事業として設立されたロック病院の名誉教誨師であった。*Thelyphthora*の中で、聖書から引用した箇所を用いて、聖書の時代における一夫多妻制の受容性を証明しようとし、そそのかされたり放棄された女性、そしてその子供たちをもだが、の誓約を軽減するための手段として擁護し

に関する唯一の証拠は、チャールズから七歳のサムエルに当てられた手紙であって、その手紙は明らかになんらかの子どもじみた、誤った行いに対する返答として書かれている。

さあ、私の良き友サムエルよ、共に論じ合おう。神さまはおまえをご自身のためにお造りになったんだ。それは（おまえが）神さまとともに幸せになるためだ。それなら、神さまにお仕えし、神さまを愛するべきではないかい？でもね、神様がおまえに力をくださらない限り、おまえにはどちらも出来ない。（神さまご自身がそう仰っているように、）求めなさい、そうすれば与えられるのだよ。お前が神さまのことを愛せるように、神さまにお祈りしなさい。お前自身の言葉、そして、教えられた言葉を使って、毎晩、毎朝、お祈りしなさい。おまえは、人が見ている前でお祈りをするには慣れている。これからは、自分だけで、神さま以外の誰にも見えない、部屋の隅にいきなさい。そこで隠れたところで見えらっしゃるおまえの天なるお父様に祈りなさい。どんな時でも、どこであっても、おまえが話すすべての言葉を神様が聞かれ、お前の全ての行いを、神様が見られるようにしなさい。

お前はもう理性と宗教によって生きるべきだ。おまえの遊びと気晴らしにも意味があるべきだ。だから私は地図や本やハーブシコードをお前に与えたのだ。おまえのお母さんがすすめるものだったらなんであれ、毎日何かを暗記しなさい。毎日聖書を一章か二章は読みなさい。おまえのお母さんは、そろそろ兄さんの代わりに、おま

---

ようとした。このことによって起きた騒動は迅速に彼に不名誉をもたらし追放へと追い込んだ。その時代にあって、マダンの議論は矮小化され誤解された。彼が一夫多妻制を擁護したという現在出ている参考文献に見いだせるあからさまな表現は、彼が *Thelyphthora* を書くに当たって持っていた複雑な思想と動機を正当化するものではない。1975年発行の *Proceedings of the Wesley Historical Society* 誌第40号、57-68頁に所収のヴィクター・N・パアナネン著、“Martin Madan and the Limits of Evangelical Philanthropy”を参照のこと。

えを、お母さんのチャプレンとして登用して、お姉さんがそうしないときには、詩篇と教訓を読ませると思う。

愚かな人たちはお前のことをとにかくも賞賛しがちだ。もし彼らがお前のうちに何かしら良いものをみたのであれば、彼らはお前ではなく、神さまを賛美すべきなのだ。音楽に関して言うと、これはそれ自身では善でも悪でもない。お前は生来の音楽性を持っている。神様がそれを与えてくださったのだ。だから神さまだけが感謝され、賛美せられるべきなのだ。お前の兄はお前以上に音楽への愛を持っているけれど、彼はそれについて誇ってもうぬぼれてもいない。お前も、そのようにならないと私は信じているよ。長い返事の手紙を書きなさい。そして、私のことを、愛すべき父、そしてお前の友達としていつも見るように。

C・ウェスレー<sup>27</sup>

このような手紙が書かれなければならなかった状況はどのようなものであれ、この手紙は、チャールズが子育てに取り組む上で持っていた本質的な寛容さと合理性の具体例として輝きを放っている。

### III

1771年に家族をブリストルからロンドンに移すことについてのチャールズの決意の大半は、子供たちに最良の教育と音楽の機会を与えたいという欲望に端を発するものであったに違いない。ロンドンであつたら、彼の子供たちは、必要とする音楽の機会をすべて得ることが出来た。同時に、子どもたちの活動の全てを、監視下に置いて支配し、悪い仲間や悪い習慣に陥らないように注意をはらうことが出来る。これが、1779年から1787年まで9期にわたって続き、おしゃれな聴衆、そしてかなりの注目を集めた、チェス

---

27 1773年3月6日付けのチャールズ・ウェスレーからサムエル・ウェスレーへの手紙(ライランド蔵、DDWES 4/70) ベーカー著、*Charles Wesley as Revealed in his Letters*, 111頁に引用されている。

ターフィールドの私邸における演奏会への理由付けであった<sup>28</sup>。予想できることだが、その演奏会はメソジズム社会の中でいくつかの論議そして強固な批判を生じさせ、その中にはトーマス・コークによる以下のようなものもあった。

わたしは、チャールズが自宅で彼の子供たちに開かせている演奏会について、神に対して非常に不敬虔なものだと感じるし、キリストの教会における彼自身の立場のゆえに、彼は犯罪人だと思う。しかし、彼らに関する様々な状況を熟考するに、私は彼らを批判することが出来ない<sup>29</sup>。

そのような意見を目にして、チャールズ・ウェスレーは彼の行いを正当化する必要を感じた。1779年1月14日付のモーニングトン卿宛の手紙において、彼は「私の息子たちに自宅で演奏会を開かせている理由」について説明している。

(1)

彼らを危害から守るため。この場合の危害とは、そのままにしておいたら子供たちの音楽的嗜好と倫理感の両方を駄目にするであろう、低質な音楽と、悪い音楽家たちのことである。

(2)

私の息子たちが、何百ポンドも費やされた音楽的才能を役立てるための、安全で尊敬に値する機会を得るため。

---

28 ライトウッド著、*Samuel Wesley, Musician* の50から55頁。コンサートのプログラム、支出報告、そして名前を登録したものと参加者の記録は、MS-L WESLEY, Cとしてロンドンの王立音楽院に、孫娘のエリザ・ウェスレーが所有する写しはロンドンの大英図書館に Add. MS 38071として所蔵されている。コンサートに関するこれ以上の書類はライランド蔵。DDCW 4/4-6, 6/52, 6/55-58, 8/15, 8/21, 9/15。

29 1779年12月15日付けの、トーマス・コークからジョン・ウェスレーへの手紙。1790年発行 *Arminian Magazine* 13号の50-51頁。

(3)

彼らが個人的見解、そして独立性をも同様に、存分に満喫するため。もし彼らが流れに沿って泳ぎ、大衆に従うのであれば、どちらも諦められなければならない。

(4)

彼らの演奏能力、そして作曲技術を向上させるため。彼らが演奏会の主要な作品を自分たちで供給しなくてはならないためである。もっとも、自分たちでは彼らの音楽的楽しみを演奏会とは呼んでいないが。多種多様な伴奏において優っている現代の巨匠たちと相対するつもりは彼らにはない。演奏会で彼らが目指しているのは、正確さの度合いである<sup>30</sup>。

後に兄ジョンへの手紙の中で彼は

私の息子たちの演奏会は、疑い無く、神のみ旨の意志と秩序によるものである。演奏会が、安全で尊敬に値するやり方で、彼らを音楽家として建て上げた<sup>31</sup>。

という確信があったことを宣言している。ジョンはこれに同意しなかった。この手紙をアルミニアン・マガジンに出版したとき、脚注の中で、下心が見え見えであった、と書いているほどである。

#### IV

ウェスレー家の大きな問題の兆候が顕著になり始めたのはこの家庭コン

- 
- 30 1779年1月14日付け、チャールズ・ウェスレーから第一モーニングトン卿、ギャレット・ウェスレーへの手紙。(ライランド蔵、DDWES 14/65) ライトウッド著、*Samuel Wesley, Musician* の51-52頁に引用されている。
- 31 1779年4月23日付け、チャールズ・ウェスレーからジョン・ウェスレーへの手紙。1789年発行 *Arminian Magazine* 12号の386-88頁に所収されている。ライトウッド著、*Samuel Wesley, Musician* の52頁に引用。

サートを行っていた時期であった。この時代のサリーについてジャクソンは何も述べない一方で、チャールズの世俗的な生き方と靈性を欠いている様は父親にとっても叔父にとっても心配の種であったと述べ、ジョン・ウェスレーからチャールズに宛てられたこの件に関する二通の手紙を引用している<sup>32</sup>。チャールズの晩年の無害な鈍感さに照らしてみると、これらの手紙がいくらかの深刻もしくは継続していた問題を反映しているとは難しい。

サムエルの件はまた別の問題であった。1778年の9月の段階で、チャールズからサラへの手紙に見ることが出来るように、サムエルの振る舞いのいくつかの側面が、心配を引き起こすものとなっていたようである。彼はローマ・カトリックに興味を持ち始めていたのである。

サムにはいくつかの逃げ道があることだろう。彼の試練は大いなるものになるだろうが、主は全てから彼を解放して下さる。サムはその身にさらなる痛みを求めている。もし私が彼を助けるために長く生きることが出来なかったら、すべてはお前の上ののしかかる。彼を生きたクリスチャンとしてくれ。そうしたら、彼は死んだような法王主義者になりたいなど思わないだろう<sup>33</sup>。

サムエルの興味が実際どのような形をとっていたかはチャールズの見解からは不明であるが、おそらく当時そこでしか合法的にカトリック式の祭儀を執り行なうことが出来なかった、ロンドン大使館ホール礼拝堂で行われていたカトリックのミサへの出席を指していると思われる。後にサムエルが回想録の草稿に記すことになるように<sup>34</sup>、彼をローマ・カトリックに最初に引き寄せたものはその教義よりも音楽であった。にもかかわらず、彼がミサに参

32 ジャクソン著、*Life* 354-55 頁。1781年の8月4日と9月8日の手紙を引用している。

33 1778年9月5日から7日のチャールズ・ウェスレーからサラ・ウェスレーへの手紙。(ライランズ蔵 DDCW 7/36) トーマス・ジャクソン編、*The Journal of the Rev. Charles Wesley* vol.;2、269-270 頁。

34 ロンドン、大英図書館 Add MS 27593

列しているという単純な事実は、最も自由な父親にとってはきつい試練であつた。チャールズの反応が落胆以外の何ものでもなかつたことは想像に難くない。

サムエルのローマ・カトリックに対する興味の始まりがどのようなものであつたのか、詳細は不透明なままである。彼の最初のローマ・カトリック教会音楽作品には 1780 年 11 月の日付がある。しかし、チャールズの手紙は少なくともその二年前から、彼が興味を持って関わりを持っていたことを示している。1779 年の第一次カトリック教徒解放決議の通過、そして 1780 年 6 月のゴードン暴動において爆発することになるカトリックにたいする強力な反対の(社会的)感情を考慮するとき、それがおこつたのがいつであれ、それは時期を逸したものであつた。上で引用したチャールズのコメントは、私たちが唯一知ることのできる記録であつて、サムエルの初期の(カトリックへの)関心に対する反応であるが、私たちはすでにサムエルの霊的状态だけでなく、身体的な安全に関しての、(チャールズの)失望と心配を見て取ることが出来る。1780 年のサムエルのローマ・カトリックとの関わりは、ゴードン暴動に関するチャールズのいくつかの詩に個人的な重要性をもたらすことになる。そのなかの一篇は、混乱がその最高潮に達し、サムエルと彼の母が、安全のために自宅から退去せなければならなくなつた 6 月 8 日に書かれている<sup>35</sup>。

サムエルのローマ・カトリックの礼拝への参列は、チャールズによって容認こそされていかもしれないが、決して歓迎されていたわけではない。しかし、サムエルの次なる行動はより過激なものであつた。1784 年の早い段階で、彼は改宗した。彼が教育を受けたのか、条件付きの洗礼を受けたのか、公式のカトリック教会への歓迎を受けたのか、は定かではない。しかし、彼が改宗したことを明らかに示す結果は、合唱と独唱とオーケストラのため

---

35 1780 年 6 月 8 日付のジョン・ウェスレーへの手紙にあるチャールズが実際に目撃したゴードン暴動の顛末を参照。ジャクソン著、*Life*、320-321 頁に引用されている。ゴードン暴動に関しては、クリストファー・ヒバート著、*King Mob: The Story of Lord George Gordon and the Riots of 1780* (London: Longmans, Green, 1958)を参照。

の壮大な「聖霊ミサ」を彼が作曲し、教皇ピウス6世に献じ、ローマに送付したことである<sup>36</sup>。改宗の顛末は、まずジャクソンによって、後にはスティープンソンによって仔細に記されることになる。どちらにとってもこの出来事は明らかに非常な興味を抱かせるものであった<sup>37</sup>。どちらの作家も、とてつもなく決まりが悪かったに違いないある出来事のことを記録している。ノーフォークの公爵夫人が、イギリスにおける最たるローマ・カトリックの信徒の妻としての職務で、チャールズに公式の訪問をし、彼の息子の改宗についての知らせを告げたのである。この出来事をさらに辛辣にしているのは、公爵夫人の息子は英国国教会のために、ローマ・カトリックを捨てたということである<sup>38</sup>。さらにサムエルの改宗は、1784年8月19日付のジョン・ウェスレーからの長い手紙のきっかけともなった。そこでは、第一次カトリック教徒解放決議直後の乱暴で反カトリック的な声明とは非常に対照的な、忍耐に溢れ平和的な語り口を見ることが出来る。サムエルの行いに対する動揺を一般論的に言葉にした後で、サムエルの宗教的慣習がプロテスタントかローマ的かという形にはこだわっていないと述べる一方、サムエルの靈性に大してのより重大な懸念を示している。

この教会に属するか、あの教会に属するかということについて、わたしはこだわらない。どちらにおいても救われることは出来るし、どちらにおいても呪われたものともなりうる。しかし、私はお前が新生の経験をしていないのではないかと危惧しているのだ。そしてお前がもし新しく生まれていないのであれば、天の御国を見ることは出来ない。お前はローマ教会が正しいと信じている。それならばどうなのか。お前が神によって生まれていないのなら、お前はどの教会にも属さない。ベラルミーノカルターのどちらかが正しいとし

36 1784年5月22日付の自署。Cambridge, フィッツウィリアム博物館, MS 730. 推敲された版はロンドンの大英図書館に。MS3500.

37 ジャクソン著、*Life* 359-360 頁、スティープンソン著、*Memorials of the Wesley Family* 505 頁を参照。

38 スティープンソンはこの事件が1785年に起きたという誤った記述をしている。

ても、もしお前が御霊によって生まれていないのなら、お前は確実に間違っているのだ、お前のところが御霊によって、お前を造った方のみかたちにへと刷新されていないのならば。

おお、サミーよ。お前はどうかしている！お前は神の道から外れている！お前は神さまにお前の心をささげていない。そうであつたら良いのだが、お前は神のうちにある幸福を見出していない。哀れな狂信者たちは、お前が今の精神状況にあるうちに、この教会かあの教会かについてお前を惑わすことだろう。おお間拔けたちよ、盲目！このような手引きたちは、浅瀬にいる者たちを底なしの穴へと導くのだ。親愛なるサミーよ、お前がまずしなければいけないことは、悔い改めて福音を信じる事だ。自分が惨めで罪に満ちた、あわれな罪人だということを先ず知りなさい。そしてイエス・キリスト、その十字架を知りなさい。聖霊が、お前が神の子供であるという証をお前の心でなし、おまえに与えられた聖霊が、神の愛を豊かにお前の心に溢れさせてくださるように。それでも何もお前の働きに改善がないのなら、その時は聖変化についてでも煉獄についてもお前と話そう<sup>39</sup>。

ローマ・カトリック事件によってチャールズにもたらされた激しい痛みは MS Samuel Wesley RC に所収されている詩作品にしっかりと記録されている。その表紙には、サリーによって「彼の息子サムエルに関する詩集：彼がローマ・カトリック教を受け入れたと知らされたときのもの」という裏書がなされている<sup>40</sup>。この中で一番良く知られている詩で、チャールズは、裏切りと

---

39 1784年8月19日付のジョン・ウェスレーからサムエル・ウェスレーへの手紙。ジョン・テルフォードが編纂した8巻本の *The Letters of the Rev. John Wesley, A.M.* (London: Epworth Press, 1931) の第7巻、230-31頁に所収。1784年5月2日付の、彼の甥チャールズに当てた手紙も参照(出典同上、216-7頁)。ジョン・ウェスレーとローマ・カトリックについては、デイヴィッド・バトラー著、*Methodists and Papists: John Wesley and the Catholic Church in the Eighteenth Century* (London: Darton Longman Todd, 1995) を参照。

40 *The Unpublished Poetry of Charles Wesley*, 第一巻、303-16頁。

してしか見ることが出来ないそのことへの悲しみを表し、彼自身の「いけにえ」をアブラハムのそれに準えている。

さらば、この世のすべての希望  
わが気質の支え、わが齢の支え  
完全に去りしものよ  
われ神聖なる意志へ服従し  
不服ながらも従い、それ自らのものとし  
我が息子をささげる！

しかしわれ神に対し無償の  
ささげものをするだろうか 我がほとぼしる目は  
悲しき答えを伝え  
我がほとぼしる目と迷える心は  
愛するものとの別れを痛み  
有り余る愛を打ち破る<sup>41</sup>

サムエルのローマ・カトリックへの改宗だけが家族に心配をもたらす振る舞いの一面ではなかった。いまやチャールズの目の前に立ちはだかるものは、サムエルの思春期の行動を説明し、そしておそらく、私たちがみたように、子供の頃に芽生えていた、全般的な手におえなさと、反抗心であった。不幸なことに、1780年代のウェスレー家の生活のおおまかな様子を補足する関連書類や手紙は数少ない<sup>42</sup>。主にサリーからサムエルへ後年書かれた手紙の中で回顧的な言及がなされており、多くの詳細を物語っている。この時代におけるサムエルの振る舞いは酩酊、朝帰り、召使への暴行までもを含んでい

---

41 *The Unpublished Poetry of Charles Wesley*, 第一巻、304頁。これらの連形式からなる詩はジャクソン著、*Life* の361-64頁、スティーブンソン著、*Memorials of the Wesley Family*, 505-6頁にも収録されている。

42 驚くに値しないことだが、*Wesley-Langshaw Correspondence* に所収されているチャールズからジョン・ラングショーへの手紙には、家庭内における問題をにおわせるようなことは何一つ書かれていない。

たと思われる。明白なのは、サムエルは明らかに父親と家族、そして彼らが支持しているものに対する反逆をしていたということである。そして、彼の行動は特に極端な例の反抗期のかたちとして解釈することが可能である。しかし、ある程度までは、それは彼を終生苦しめることになる躁鬱病の軽躁段階における初期発症であったとするほうが、妥当であろう<sup>43</sup>。

サムエルの大胆な行動に関する私たちの知識は、ともすればその調子が直情的で神経質であるとして片付けられてしまうMS Samuel Wesley RCに所収されている詩群において例えば次のような一節を読む上で、ふさわしい文脈を提供するものである。

酩酊と、破茶滅茶騒ぎから  
不道德と、あきらかな邪悪さから、  
彼の浅はかな若さは拘束され  
その一方で、お世辞はなだめ、快樂は微笑み、  
売春婦はその華奢な労働を開き  
栄光は虚しく言い寄る<sup>44</sup>

おそらく 1780 年代の家庭内の緊張の最も大きな理由は、後に結婚することになるシャーロット・ルイザ・マーティンとの、サムエルの関係であったろう。彼らは 1782 年の 10 月の段階ですでに出会っていた。サムエルは 16 歳でシャーロットは 21 歳か 22 歳であった。その交際は、どれだけの正当な理由があったかは不明だが、シャーロットの性格が不適當だと判断さ

---

43 サムエルの生涯に渡る長期の鬱は伝記作家たちによって長い間認識されてきた。しかし、躁鬱病という診断が下されたのはより最近の事である。しかし、この診断は、彼の人生における出来事、独創性の傾向、そして書簡によってしっかりと裏打ちされている。躁鬱病については、フレデリック・K・グッドウィン、ケイ・レッドフィールド・ジェイミソン共著、*Manic-Depressive Illness*(New York and Oxford: Oxford University Press, 1990)、ケイ・レッドフィールド・ジェイミソン著、*Touched with Fire: Manic-Depressive Illness and the Artistic Temperament* ( New York: Free Press, 1993)を参照。

44 The Unpublished Poetry of Charles Wesley, 1 巻、305 頁。

れたことが理由で、家族によって暴力的に反対された<sup>45</sup>。私たちは同時に、サムエルの若さと、彼とシャーロットの間には五歳の年齢差があったということが問題になったと考えることも出来る。予想できることだが、サムエルは、交際を破棄するべきだという両親の主張に応じることを拒否し、それはチャールズが死ぬまで、家庭内の紛争の激しい火種として続いた。

二人の関係のその後は、ここでは直接的な関係はないとはいえ、サムエルのその後の行動そして彼が家族の価値観と因習、そして当時の確かにまともな社会からどれほど離れたかを示すものとして、描写するに価するものである。10年以上に渡る家族への反抗の後、サムエルとシャーロットは1793年の4月に結婚する。結婚するすこし前には、彼らは共に住み、お互いを夫と妻というようにみなした。その一方であらゆる結婚に関する礼典を拒み、彼らの立場に関する神学的な正統さを唱えてさえもいた<sup>46</sup>。その立場の放棄は、まごうことなく、シャーロットの妊娠、その子供そして後に生まれてくる子供たちが非嫡出子になるという不名誉を避けたいとする彼らの願望によってもたらされた<sup>47</sup>。結婚の後、二人の関係はただちに悪化し始め、その後の結婚生活は不幸で嵐に満ちたものであり、しばしば喧嘩や、サムエル側の不貞、双方における暴力沙汰を伴うものであった。1810年の初頭によく彼らは離別し、その後サムエルは彼の家政婦であったサラ・スターと

---

45 1792年11月7日付のサムエルから母に宛てた手紙（ライランズ蔵、DDWF/15/5）の中でサムエルはシャーロットが浪費癖があり気まぐれで放縦な性格の持ち主だという糾弾に対して彼女を弁護している。

46 この立場は部分的にマダンの *Thelyphthora* における論議に起因している。マダンに倣って、サムエルは、聖書の時代には宗教的な結婚儀礼の存在を示すいかなる証拠も見当たらないということ、そして結婚は男女の肉体的な結合によってのみ成立するものだという主張をした。この基準によれば、1792年の11月7日付の母親宛の反抗的な手紙で宣言されているように、彼とシャーロットはすでにこの時までには明らかに夫と妻であった。「彼女は紛れもなく厳密に、神と自然の全ての法に従って、私の妻である。これ以上ふさわしくなりえない。荘厳な詐欺師の金づくの小細工にかけて・・・」

47 彼らの最初の子供はチャールズである。スティープンソン(*Memorials of the Wesley Family*, 539頁)によれば、1793年9月25日に生まれ、10月20日に（幼児）洗礼を受けた

懇ろな中になった。彼女は 15 - 16 歳であり、サムエルは 43 歳であった。サムエルは死ぬまで彼女と暮らし、少なくとも七人の子どもを、シャーロットとの間に設けた三人に加える形で設けた<sup>48</sup>。当時離婚はウェスレー家ほどの立場の者には容易に可能なものではなく、サムエルとシャーロットは（法的には）結婚したままであった故、サラ・スーターとの間の子供はすべて非嫡出子であった。

1780 年代に、サムエルの晩年におけるこれらの逸話は未来へ向けて萌芽する。しかし、先に説明された一連の出来事から顕著のように、これらの年月はチャールズにとって、絶え間ない家庭内の緊張と混乱に満ちたものであったろう。我々は何によりもまず、8 年にわたる家庭音楽会によってもたらされた、家庭内の日常生活への絶え間ない混乱、もしくは、チャールズがより静かな生活を送りたいと間違いなく願っていた時に、彼に対して（家族から）かけられていた圧力などを、過小評価するべきではない。しかしながら、もっとも顕著な問題は、サムエルの振る舞いであった。それ以外の、息子のチャールズとサリーの行動における欠点は些細なものであったに違いない。ジャクソンやスティーブンソンのような 19 世紀の作家のように原因を説明し、サムエルの行いへの責任追及するほどの自信をわかちあうものは数少ない。そして現代における説明は、彼の精神病によってもたらされた部分をより考慮するであろう。しかしながら、どのような理由であれ、サムエルの人生のこの時点におけるすべての重要な行動は、直接的であれ間接的であれ、彼の父への反抗の表れであった。チャールズ・ウェスレーの晩年の物語の重要な場面は、このひどく失敗した関係、そしてそれによって間違いなくもたらされた痛みと苦しみののに違いない。

---

48 それに加えて、シャーロットによるもう一人と、サラ・スーターによる二人の子どもは、嬰兒の頃もしくは子供時代の早い時期に亡くなっている。